

京都の景観と「俵屋」

6月28日の国家経済研究会で拙著『公共事業と財政』の書評会が行われた。拙著の概要説明のあと、手厳しいコメントや批判がなされた。「防戦」一方であったが、大きな刺激をうけるとともに、公共事業研究に対する多くの示唆を得ることができた。その詳細については、じっくりと考えて記していきたい。

久しぶりの京都である。降りつづく雨、じっとりとした蒸し暑さであったが、早めに到着して市内を散策した。お目当ては老舗旅館の「俵屋」である。これには「わけ」がある。

現代都市問題という講義のなかで、京都の景観問題を取りあげている。やはり学生の関心も高い。バブル以降、どれだけ京都の「まちこわし」がすすみ、古都の貴重な景観が破壊されたかを映像なども使って説明してきた。その一つがクローズアップ現代で放映された「俵屋」をめぐる景観論争である。「俵屋」近くにマンション建設が計画され、庭先などの景観破壊が予想され、建設差止めをめくり裁判で争われることになった。

私もテレビで見ただけであり、その後の「俵屋」が気になっていた。今年の講義で学生からの質問もあり、「俵屋」の現在を知りたかった。京都在住の卒業生に調査を依頼したり、京都を旅した学生に写真を撮ってきてもらったりした。卒業生の調査によると、裁判は和解となり、マンションは建設されたという。

雨のなか「俵屋」を求めて歩き回り、何枚かの写真を撮ることができた。場所は京都市役所の近くだが、大通りを一步なかに入ったところにある。さすが老舗だけあり、端正な造りの建物であり、「風格」のようなものがあつた。評判の庭を見たかったが、時間に追われて写真だけ撮って研究会の会場に向かった。

(7月1日記)

